OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	第8講　万博を読み解く（2）
Author(s)	福田, 州平
Citation	GLOCOLブックレット. 2013, 12, p. 86-97
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48287
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

第8講
万博を読み解く(2)

1. 近代国家における儀式の政治的重要性

前回、愛知万博、大阪万博、そして幻の1940年の万博計画についてお話しました。歴史を逆からたどっていくと、愛知万博にみられる市民の力や環境問題の重要性は、大阪万博では見出すことができませんでした。大阪万博では当初近代科学のもたらした「不調和」をテーマとする案があったものの、結局は科学技術が切り開く「明るい未来」に彩られるものとなってしまいました。そして、両万博の正式名称は、「日本」という国家が前面に出るものであり、その起源は、1940年に開催が予定されていた「紀元2600年日本万国博覧会」でした。この万博は、幻に終わってしまいましたが、天皇制イデオロギーや帝国主義的なイデオロギーが根底にながれるイベントでした。そして、日本だけでなく、ナチス政権時のドイツやムッソリーニ政権時のイタリアでも、自国の政治的イデオロギーに基づいて万博が計画されていました。

なぜ、ここまでして、国家は万博のようなメガイベントをやりたがるのでしょうか？まず、考えるきっかけとして、みなさんにひとつ質問したいと思います。「国家」というものを実際に見たり、あるいは触ったり、匂いをかいだことがある方、このなかにいらっしゃいますでしょうか？　おそらく、いないと思います。国家は「想像の共同体」で、人びとは、見ることとも触ることもできません。しかし、世の中には今も「国家のために死ぬ」という人がいるぐらい、その実在性をみな信じています。そして、めったに会うことができない政治家や官僚の統治が、国内で作用しています。

では、どうやって「国家」の存在をみな信じるようになるのでしょうか。それは、国旗や国歌、あるいは神話的なエピソードなど――これらをシンボルといいましょう――を通じて、理解しているわけです。デイヴィッド・カーツァーという人類学者は、「直接観察をはるかにしのぐ社会に住む私たちは、抽象的シンボル手段をとおしてのみ、より大きな政治実体と関係できるのだ」(カーツァー 1989: 18)といっております。人びとは、シンボルを生み、そして消費します。こうすることによって、さまざまな出来事やモノ、あるいは人生などに意味を与えようとするのです。

このシンボルが網のように組み合わさったものが、儀式です。儀式は、私たちの住む世界に意味を与える助けになります。これは国家にとっても重要です。人びとは、シンボルを通じて社会を理解しようとします。シンボルを通じて、何が重要で、なにが良いことなのかを学ぶわけです。そして、シンボルが組み合わさった網である儀式への参加を通じて、人びとは、「国家」の存在を理解し、それと一体化しようとします。たとえば、選挙がその例です。選挙という儀式を通じて、人びとは国家の政治に参加しているように感じます。選挙は、一般の国民が国政に参加する数少ない機会のひとつです。もっとも、投票結果が国政に反映され、公共政策形成に影響を与えることは、みなさんも痛切に感じているかと思いますが、稀かもしれません。ここで言いたいのは、選挙は、意味がないということではありません。むしろ、選挙の役割は、普通に考えられているのとは、違うところにあるといいたいのです。選挙を政治的な儀式として考えれば、それへの参加によって、人びとは国家の存在を認識し、採用された公共政策を受け入れることが理にかなっていると思わせるものだといえるのです。こうした仕組みがないと、「国家」は持続的な存在とはなりえません(エーデルマン 1998)。あくまでもシンボルと政治の観点からはこういえるというだけであって、選挙の意義そのものを否定しているわけではないので、その点はお間違いのないように。

万博は、非常に重要な政治的儀式だといえます。なぜなら、パビリオンや展示物といったシンボルによって、人びとはある種のイデオロギーや観念を学び、共有することができるわけです。いや、それ以外に手段がないのかもしれません。そうした政治的な意図がかなり明確にあらわれていたのが、前回触れた1940年の万博計画だったと思います。また、大阪万博は、高度経済成長を果たした「国家」の姿を確認するためであり、また原子力などのイデオロギーとしての近代科学技術を広めるための儀式だったといえると思います。ところが、いままでの儀式のやり方では、そろそろうまく行かなくなってきたのが、愛知万博だったと思います。

今回は、万博の歴史をさらに遡ることで、政治的儀式としての万博が果たしてきた役割について考えるための材料を提供したいと思っています。

2. セントルイス万博

まず、1904年4月30日から12月1日にかけて、アメリカのセントルイスで開催された「ルイジアナ買収100周年記念国際博覧会」(以下セントルイス万博)についてみていきたいと思います。

この万博の開催には、2つのコンテクストがあります。1つは、米西戦争の「成果」を示すものだったということです。19世紀後半に、ヨーロッパの大国は植

民地獲得のために海外へ進出していきます。アメリカはカリブ海への進出を狙うのですが、これがスペインとの対立を生み、両国の関係は極度に悪化していきます。そして、1898年に発生したのが、米西戦争です。この戦争はアメリカの勝利に終わり、フィリピン、プエルトリコ、グァムを獲得し、さらにキューバを被保護国としました。この「成果」を人びとに示そうとしたのがセントルイス万博だったのです（吉見 2010: 202）。

もう1つは、「ルイジアナ買収」です。1803年に、アメリカはフランスから「仏領ルイジアナ」を買収しました。かなり広大な土地で、この買収によって、当時のアメリカ国土の面積は2倍になったそうです。この買収からちょうど100年後の1903年に万博を開催すべく計画されたのが、セントルイス万博だったのです。ところが、外国やアメリカ国内各州の出典参加を得るため、1904年に開催を延ばしたのです（平野 1999: 51-52）。

セントルイス万博で来場者の関心を特にあつめたのが「人間の展示」でした。会場内の3ヶ所で、先住民などの「展示」が大々的におこなわれていたのです。この展示実現に大きな役割を果たしたのが、アメリカ民族学会長のW. J. マクギーという人でした。この人は、人種のヒエラルキーは人種間における頭蓋容量と手先の器用さの差異に基づくと信じ、人類の進歩にとって重要なのは白人の責務であるとする考えをもっていました。そして、マクギーは、人類学研究室を会場内に設け、絶え間なく続く来場者の前で、頭蓋骨の大きさと知能の関係についての計測などをおこなっていたそうです。当時最先端の科学的手法によって、アングロ・サクソンの人種的優越性を来場者に示そうとしたのです（Rydell et al. 2000: 54）。

そして、先住民の人びとの展示についてもかなり大掛かりなものがありました。その代表格ともいえるのが、会場内に設けられた「フィリピン村」（フィリピン保留地）です。広さが19万2000平方メートルの敷地に、1200人にもおよぶフィリピン諸島の諸エスニックグループの人々があつめられていました。フィリピン村は、「スペイン植民地時代の過去」、「植民地の状態である現在」、そして「アメリカの保護の下に実現される未来」の3つの文化エリアに分かれていました。フィリピンでのスペイン時代は、当時マニラに存在した植民地風の建物の数々によってあらわされていました。現在の様子は、数々のエスニック・グループが進化論的に階層化されて示されていました。そして、アメリカの保護下において実禅される未来は、アメリカ軍と協力した準軍事部隊のフィリピン人偵察部隊と警察隊が象徴していました。こうした展示を通じて、「フィリピン人にはまだみずからの国を統治する能力がない」と、フィリピンの植民地化を正当化するイデオロギーが広く共有されていったといわれています（吉見 2010: 206-208; Rydell et al. 2000: 55）。

フィリピンの先住民の人びとだけでなく、他の参加国も先住民の展示をおこないました。日本からはアイヌの人たちの「展示」が行われました。もともと、シカゴ大学初代人類学科教授のフレデリック・スターという学者が、さきほどのマクギーからの依頼によって、日本の関係諸方面に働きかけて展示を実現させたそうです。ここでの「展示」は、計9人のアイヌの人たちが、セントルイス万博会場内で、故郷そのままの住居をつくってそこで生活をし、この様子を来場者が見るというものでした（宮武 2010: 57-75）。

先住民に関連するイベントについて、少しお話したいと思います。前回の講義で、日本が1940年にオリンピックと万博を同時に行う計画をたてていたことをお話しました。これは、決して歴史的に前例のないことではありません。オリンピックは、第2回目（1900年パリ）と第3回目（1904年フィラデルフィア）が万博とともにおこなわれているのです。万博会場内で行われた第3回オリンピックでは、開催期間中の1904年8月12日と13日にかけて、「人類学の日（Anthropology Days）」と呼ばれる競技がおこなわれています。当初、この競技は、非西洋人全体の「人種間競技」として予定されていました。本体のオリンピックの競技参加者はほぼすべてが白人だったのに対し、非白人の競技は人類学の日として企画されたのです。これには、日本人、中国人などの参加も予定されていたそうですが、「文明化」された彼らが先住民と同一視されることを拒否したため、実現しなかったそうです。こうして、競技参加者のほぼすべてを、セントルイス万博の「人間の展示」のために世界各地から来ていた先住民の成人男性たちが占めることになります。初日におこなわれた競技は参加者に経験がほとんどない種目のため、その成果は白人競技者とくらべて芳しくなかったそうです。そして、白人の優越性を示す兆候の一つとなってしまいました。なお、2日目は、先住民のスポーツとして、たとえば木登りのような競技がおこなわれたそうです（宮武 2010: 94-106）。

3. 内国勧業博覧会

1903年、大阪で第5回内国勧業博覧会というイベントがありました。内国勧業博覧会（内国博）は、「内国」というコトバが示すように、ドメスティックなイベントです。外国が出展するということはなかったわけです。しかし、第5回内国博は、14ヵ国18地域が参加し、「内国」博覧会の枠を超えて、ちょっとした万博といってもさしつかえないぐらい国際色のあるイベントでした（國 2010: 173-193）。

この第5回内国博をとりあげる前に、それ以前のことをお話したいと思います。1873年のウィーン万博、そして1876年のフィラデルフィア万博への参加

を通じて、日本は、欧米の工業力に圧倒され近代化の必要性を痛感するとともに、博覧会が国家の近代化に有用であることを学び取ります。そして、内務省で産業興行策として「勧業博覧会」の企画がたちあがり、これに「内国」というコトバがつけたされます。なぜ、「内国」というコトバがつけたされたかというと、国内に目を向けることを優先したという理由もありますが、当時の不平等条約では、日本と外国の間でトラブルが発生したとき、日本側に著しく不利益が生じるおそれがあったという点も大きいと思います（國 2010: 90-91）。条約改正によって、さきほど申しました第5回目は、実質的な「万博」となりえたのです。

第1回目は、1877年8月11日から11月30日にかけて、東京で開催されました。内国博では、開会および閉会をつかさどるのは天皇の役割とされました。開会式では、皇后および侍女をのぞき、天皇をはじめみな西洋式の服を身にまとって式を行ったのですが、これは内国博が、西洋化について国民にメッセージを発するとともに、天皇制統治の正統性を知らしめる場として機能したことを意味しています。そして、第2回目（1881年3月1日〜 6月30日）、第3回（1890年4月1日〜7月31日）と東京で内国博が行われ、第4回開催をめぐっては招致合戦が繰り広げられ、京都で行われることになります（1895年4月1日〜7月31日）（國 2005; 2010: 88-203）。

第5回内国博開催をめぐっても、招致合戦があったのですが、大阪が開催権を勝ち取ります。つづいて、大阪のどこで開催するかが検討され、天王寺今宮が選ばれます。そして、博覧会場へ通じる「一条ノ大道路」を作るように所管官庁から要請があり、日本橋筋の拡張に取り組みます。このとき、日本橋筋に面する「細民部落」が取り壊され、ここに住む「貧民」たちは、なにも保証がないまま退去させられました。当時、「貧民」および「貧民街」は、「不潔」かつ「反秩序的」で、存在自体が「われわれ」の住居する市および国家の「体面」を汚すと考えられていました。特に、内国博は、天皇の来阪、および外国人の来阪が期待されていたため、これは強く意識されました。また、当時、急性伝染病が博覧会の来場者数に大きな影響を与えるファクターでした。急性伝染病の撲滅が内国博の成否におおきくかかわることから、さまざまな措置が講じられ、その措置の一環として「貧民街」の取り壊しがおこなわれたのです（松田 2003: 19-35）。

1903年3月1日、第5回内国博の「開場式」が開催されました。しかし、4月20日に天皇臨席のもと盛大に「開会式」が開催されています。少々ややこしいのですが、これは、内国博を開会するのは天皇の役割であって、天皇が来場しなくても場所は開かれるが（開場式）、会は開かれないのです。博覧会という空間は、天皇のための政治的空間でもあったのです（松田 2003: 49; 國 2005）。

数々のアミューズメント施設が、第5回の内国博で注目されました。動物園、ウォーターシュート、イルミネーション、夜間開場、さらには不思議館で行われたカーマンセラの電気の舞[1]、堺市に作られた水族館など、当時の人びとの目を奪うものが多数ありました。開会期間中の入場者数は、昼・夜および水族館の来場者を含めると、530万人にものぼります。

ここで、第5回内国博の台湾館と学術人類館に注目したいと思います。まず、台湾館です（伊藤 2008: 106-112; 國 2005: 174-180; 松田 2003: 55-81）。台湾館設置にあたっては、台湾総督府がずいぶん熱心に働きかけを行い、そして実現したものです。台湾館は、篤慶堂（とくけいどう）という建物を模したパビリオンでした。台湾は下関条約（1895年）によって、日本の植民地となりましたが、その後も台湾では日本の支配に抵抗する人たちがいて、日本は武力平定に乗り出します。その武力平定に、近衛師団長でかつ皇族の北白川能久親王が参戦しています。そして篤慶堂は、この武力平定のさいに、北白川が休憩所として使用した場所なのです。彼は、戦場でマラリアに感染して、台湾で没しています。こうした経緯から、篤慶堂は、皇族がわが身を挺して「野蛮」な台湾に「文明」の光をもたらしたという物語を示すシンボルだったのです。

もうひとつ、第5回内国博で忘れてはならないパビリオンが、「学術人類館」です。神戸のアメリカ人商人が、日本「内地」に近い各国の異人種を集めて、「生身」の人間を「展示」する場外パビリオン、「人類館」を企画しました。しかし、内国博開催直前、清国からの留学生たちが人類館の展示に清国人がいることを知り、抗議運動を展開します。抗議は、清国公使から外交ルートでも行われました。これを受けて、主催者は、清国人の「展示」を中止し、さらに名称を「学術人類館」へと改称する措置をとりました。見世物ではなく、学術であることを正当性の根拠として、非難をかわそうとしたといわれています。そして、当時の人類学の「権威」であった坪井正五郎などの助力が学術人類館に寄せられました。ところが、開会後も抗議はつづきました。まず、来館した朝鮮人から朝鮮人女性の展示に関する抗議が寄せられただけでなく、同時に韓国公使から外交ルートでの抗議が行われたのです。抗議を受けて、学術人類館側は、朝鮮人の「展示」を止めています。さらに、「展示」された人たちのなか

1　電気の舞とは、サーペンタインダンスのことである。サーペンタインダンスとは、アメリカの女性ダンサー、ロイ・フラー考案のダンスである。このダンスは、袖口に棒を結び付けた極端に大きな衣装を身にまとい、衣装をはためかすように腕や体を回転させ、そこにカクテル光線を照射させることで、視覚的な効果を狙っている。フラーのダンスは好評を博し、1900年開催のパリ万博でも披露され成功をおさめた。フラーの興行と同様のものが、内国博でも行われたのである（荒俣 2000: 100-122）。

に、琉球人がいて、『琉球新報』紙上で抗議の大論陣が張られました。これを受けて、琉球人の「展示」も中止されました。「生身」の人間の「展示」への批判、それ自体は人権の観点から考えても当然といえます。しかし、この「展示」に対する抗議の論理が、かなり大雑把にいってしまうと、「文明」と「野蛮」の境界線だったことから、かなり問題をはらんでいます。つまり、「野蛮」にふくまれることへの抗議だったのです。「文明」のほうに抗議側がいる。他方で、「野蛮」のほうに「アイヌ」とか「台湾生蕃」がいるというものです。社会進化論的なモノの見方なのですが、これは、学術人類館の協力者である人類学者も共有していました（伊藤 2008: 113-119; 松田 2003）[2]。

4. パリ万博

フランスのパリは、万博の歴史を語るうえで、非常に重要な位置を占めていて、数々の万博が行われています。特に、1889年に行われたパリ万博は、今でもパリの名物となっているエッフェル塔がつくられたことで有名です。1880年代、フランスの国内政治は不安定でした。そこで、フランス第3共和制の威信を国内外に示しかつ利潤を上げるために万博が行われたのです。約6ヵ月の開催期間中に約3200万人の入場者を集め、800万フランの利益を上げたといわれていますので、興行的には成功といえるでしょう。また、この万博は、フランス革命100周年記念として位置づけられていますが、そのためにヨーロッパの君主国家との摩擦を呼んでしまいました。しかし、最終的には、多くの国々がこの万博に参加しています（平野 1999: 35-40; Jackson 2008: 19-22; Swift 2008）。

1889年のパリ万博は、大掛かりな植民地展示を行ったことでも重要な意味をもっています。パリのシャン・ド・マルスとトルカデロの間の約40ヘクタールにフランスの植民地館が林立しただけでなく、アジアやアフリカの人びとを会場内に再現された先住民集落に住まわせて展示しました。セントルイス万博や第5回内国勧業博覧会でみられたような「人間の展示」が、この万博ではじめて登場したのです。「見世物」として先住民の人たちを出すということは、この万博以前にも見世物小屋で行われていたことです。しかし、大人数で構成される社会をそのまま移植し、非西洋社会を社会進化論の階梯の中に位置づけ、かつ「未開社会」展示の大掛かりな仕掛けを国家みずからが用意するという3点で、これまでの見世物小屋とは異なっていたと吉見俊哉先生は指摘しています。パリ万博の会場は、エッフェル塔などが表象する「文明」が、先住民集落が表象する「野蛮」を支配する構図が示されていたのです（吉見 2010: 189-194）。

第3共和制は、普仏戦争の敗北やパリコミューンを乗り越え、そして文明の担い手としてのフランスの姿を世界に示すべく、1889年から遡ること11年前にもパリで万博を開催しています。国民の間の政治的な対立を乗り切る政治的な手段として、万博が用いられたのです。では、第3共和制は、どこからその手法を学んだのでしょうか。

ここで、キーパーソンを登場させましょう。あのナポレオンの甥、ナポレオン3世です。彼は1851年に普通選挙を取り戻すことを口実にクーデターを起こし、そして翌年に帝位に就いて、第2帝政をはじめました。ナポレオン3世は、幼少から青年期にかけて、ナポレオンが没落したために、ヨーロッパ各地を転々としていました。亡命先としてイギリスにいたこともあります。こうした経験があるため、彼は、後ほどお話するロンドン万博がどのような効果をもっていたのか理解していたといわれています。また、国内における権力基盤強化、および帝国の栄光という夢で国民の目を現実からそらす必要性を感じていました。そこで、彼は、クーデターからまもなく、万博開催を決断します。また、彼は外交方針として、イギリスとの関係強化を考えていました。それも万博に織り込もうとします。こうして、1855年にパリで万博が開催されるのですが、来場者は展示物である蒸気機関車などの機械類に魅了されました。また、イギリスからはクリミア戦争の協力のお礼をかねて、ヴィクトリア女王と夫君アルバート公が来訪し、ナポレオン3世の狙いどおり、英仏関係の強さを世界的に示すことができました。興行的には赤字のイベントだったのですが、ナポレオン3世がフランスの君主であると世界的に認めさせたということという意味では、政治的な成功を収めたといえます（鹿島 2000; 2010）。

1855年のパリ万博開催の企画者たちは、サン＝シモン主義といわれる科学の優位のもとに産業社会をすすめようとする思想をもち、そして万博を「百科事典」として、あらゆる科学的知識を集結させ、事物への表現形式に変えようと考えていました。しかし、それは不完全に終わったと考え、より徹底的にすべく企画された万博が、1867年に同じくパリで開催されました。ナポレオン3世は、その会場地をパリのシャン・ド・マルスにしました。ここは、ナポレオン3世の叔父、ナポレオン1世の凱旋の舞台であり、万博開催を産業の大帝国である第2帝政の凱旋ととらえて、会場地の決定を下したのです。こうして開催された1867年のパリ万博では、会場内を走る蒸気自動車が来場者の注目をあつめました。また、ワインの品評会、植物園、水族館、諸外国の食

2　本稿では紙面の都合上、詳細に論じることができなかったが、人類館事件はかなり大きな問題であり、さらなる検討が必要である。人類館事件について考察を深めるための文献として、演劇「人類館」上演を実現させたい会編（2005）をあげることができる。

が楽しめるビュッフェなど、来場者をひきつける仕掛けがありました。そして来場者の関心をあつめるべく、非西洋を異質なものとして演出し展示しようとする試み、つまりオリエンタリズム的な展示がおこなわれました。これは、第2帝政の威光を非西洋諸国がうけいれることで、「野蛮」から「文明」へと導かれるのだというメッセージだったのです（鹿島 2000）[3]。

1867年のパリ万博は、興行的に成功し、収支決算は大幅な黒字でした。万博の熱狂によって来場者の記憶にのこったのは、これまで見たことがないものだったり、アトラクション的な展示物でした。こうした「祝祭」としての万博の記憶は、ナポレオン3世失脚後も生きつづけ、第3共和制の支配者たちに利用されることになります。そして、万博が政治的対立を乗り切る手段として用いられるようになったのです。

5. ロンドン万博

1855年のパリ万博は、1851年に開催されたロンドン万博に衝撃をうけて企画された側面があります。1851年のロンドン万博は、史上初めての万博だったとされています。博覧会という形では、1851年以前にも、1844年に開催されたパリ博覧会、あるいはもっと遡って1789年にフランスで行われた博覧会の存在が指摘できますが、これらは国内向けのイベントでした。諸外国が参加しその展示物が並ぶ国際的なイベントとしての万博は、ロンドン万博がはじめてだったのです。

なぜ、ロンドン万博の企画者たちは、国際的な要素を入れたのでしょうか。いくつか要因があると思いますが、万博開催の主たる目的は経済的なものだったといわれています。当時、イギリスは自らの産業力が世界を牽引していると思っていまし、実際にそうでした。その一方で、今後、ヨソの国との競争が激しくなるとも思っていました。負けないためには、より多く自国の製品を売るしかありません。そのためには、市場を開拓せねばならない。そこで、世界の国々を招聘して、製品の度合いを比べあう「平和的な競争」に参加してもらうことを通じて、海外市場を開拓する足がかりにしようとしたのです。この「平和的な競争」こそ、万博にほかなりません。当時のイギリスは、外国の人が万博会場を訪れたら、イギリス製品を絶対買うだろうと思っていたのです。また、

3　鹿島によれば、1867年のパリ万博では、ヨーロッパ諸国やアメリカだけでなく、五大陸から参加している。非ヨーロッパ諸国は、独自のパビリオンを建てたが、これには主催者側がヨーロッパと異なるものを提示しようとした意図が潜んでいる。そして、これらの国は、事物だけでなく「人間」も展示しようとした。たとえば、日本の「芸者」、清国の「巨人と小人」といった「展示」が行われている（鹿島 2000）。

会場をおとずれた大衆が多数の展示物を直接目にすることで、産業および商業の価値を学びとらせる教育目的もありました（吉見 2010: 40-41; Greenhalgh 1988: 9-10）。

ロンドン万博の会場に建てられた展示施設、水晶宮は、当時としては画期的なガラスを建材とした建物であり、大変な注目を集めました。水晶宮の建築が可能になった背景には、産業革命によるガラスと鉄の産業の大量生産の存在が指摘できます。水晶宮のなかに、イギリスおよび諸外国からの展示品がならべられ、特に当時最先端の機械類は人びとの注目をあつめました。また、機械類だけでなく、石鹸やクツ、あるいは義手や義足など、日用品や医療用品も展示されていました。さらには、奴隷制度をもつアメリカ諸州への輸出用として手錠や鎖などが展示されていたそうです。こうして水晶宮で作り出されたこれまでにない非日常的な空間は、訪れた人びとに、近代産業社会が生み出す多様な商品であふれた世界の姿を提示したと指摘されています（吉見 2010: 第1章; 松村 2000）。

ロンドン万博の入場者数は、603万人であり、興行的にも大幅な黒字を記録しました。この成功をうけて、その後、1853年にダブリンおよびニューヨークで万博が開催されますが、内容や規模の面ではロンドン万博に及ばず、また興行的には振るわなかったようです。ロンドン万博の後継者こそ、さきほどお話した1855年のパリ万博だったのです（吉見 2010: 第1章; 松村 2000）。

6. 近代の箱庭

かなり駆け足でしたが、今回は、1904年から遡って1851年までたどり着きました。こうやって歴史をたどってみると、万博は、植民地主義の正当化や近代産業社会の拡大などのための、国家的な政治的イベントであることがなんとなくつかめていただけたのではないでしょうか。

万博の歴史は、消費文化、科学技術、植民地主義、自己／他者、都市空間形成、国家の威信、国民統合、資本主義などさまざまな要素が混在した、いわば「近代」といわれているものの「箱庭」といえると思います。そこは、決して、非政治的な場所ではありません。きわめて政治的であり、「近代」といわれているもののあらゆる要素がつめこまれ、権力作用が働く場所なのです。したがって、万博の歴史を読みほぐす作業は、「近代」といわれているものを読み解いていく作業にほかなりません。

今回の講義では詳しく触れることはできなかったのですが、万博を契機に世界的なブランドになったものや、生活習慣に影響を与えるようになったもの、あるいは万博で初めて人びとの前に姿をあらわしたモノなどがございます。た

とえば、1867年のパリ万博のワインの品評会こそ、今日でも有名なフランスワインのシャトーを知らしめるきっかけとなったイベントです。それ以前、フランスワインのイメージは芳しくなかったのですが、この万博によってフランスワインのブランド力が上がったのです。また、大阪万博では、ファストフードが日本に初上陸したともいわれています[4]。

「国家」が姿をあらわす万博という政治的儀式は、その参加を通じて、国家への自己統一性を私たちに与えようとするだけでなく、私たちの生活様式あるいは考え方といったミクロレベルにまで力を及ぼしてきたのです。だからこそ、万博の歴史の研究は、一見好事家のみが扱うようなものと思われがちですが、「近代の箱庭」であり、現代文化を考えるうえで大いなる示唆を与えてくれる政治的かつ国際文化的な研究対象なのだと、私は考えているので、2回にわたって講義でとりあげたのです。

それはさておき、次回は、サステイナビリティを扱います。では、また来週。

引用文献

荒俣宏
　2000　『万博とストリップ』集英社。
伊藤真美子
　2008　『明治日本と万国博覧会』吉川弘文館。
エーデルマン、マーレー
　1998　『政治の象徴作用』法貴良一訳、中央大学出版部。
演劇「人類館」上演を実現させたい会編
　2005　『人類館―封印された扉』アットワークス。
鹿島茂
　2000　『絶景、パリ万国博覧会―サン・シモンの鉄の夢』小学館。
　2010　『怪帝ナポレオン三世―第二帝政全史』講談社。
カーツァー、デイヴィッド・I
　1989　『儀式・政治・権力』小池和子訳、勁草書房。
國雄行
　2005　『博覧会の時代―明治政府の博覧会政策』岩田書院。
　2010　『博覧会と明治の日本』吉川弘文館。
橋爪紳也監修
　2005　『万国びっくり博覧会―万博を100倍楽しむ本』大和書房。
平野繁臣
　1999　『国際博覧会歴史事典』内山工房。
松田京子
　2003　『帝国の視線―博覧会と異文化表象』吉川弘文館。
松村昌家
　2000　『水晶宮物語』筑摩書房。

4　ワインの格付けの登場については、鹿島(2010)を参照。また、日本におけるファストフードの上陸については、橋爪監修(2005)を参照。

宮武公夫
　2010　『海を渡ったアイヌ―先住民展示と二つの博覧会』岩波書店。
吉見俊哉
　2010　『博覧会の政治学―まなざしの近代』講談社。
Greenhalgh, Paul
　1988　*Ephemeral Vistas: the expositions universelles, great exhibitions and world's fairs, 1851-1939* New York: Manchester University Press.
Jackson, Anna
　2008　*EXPO International Exposition 1851-2010* London: V & A Publishing.
Rydell, R. W., J. E. Findling and K. D. Pelle
　2000　*Fair America* Washington DC: Smithsonian Books.
Swift, Anthony
　2008　'Paris 1889,' In Finding, J. E. and K. D. Pelle eds., *Encyclopedia of World's Fairs and Expositions* North Carolina: McFarland & Co Inc Pub. pp. 100-108.